

令和４年度 第１回丸亀市産業振興推進会議 全体会議 (会議録)	
日 時	令和４年７月８日（金）午後２時～午後４時
場 所	丸亀市生涯学習センター４階 講座室１
出席者	(丸亀市産業振興推進会議 会長) 小山会長（京都橘大学経済学部 准教授）
	(丸亀市産業振興推進会議 委員) 21名中、16名出席 内海委員、奥田委員、梶谷委員、桑田委員、杉尾委員、筒井委員、 西川 平二委員、馬場委員、濱中委員、東原委員、藤井委員、 松岡委員、松下委員、真鍋 有紀子委員、真鍋 宣訓委員、矢野委員 (五十音順)
	(丸亀市産業文化部) 林部長 (丸亀市産業文化部 産業観光課) 平尾課長、志村副課長、逢坂観光担当長、村山商工労政担当長、 横井主任、吉田副主任 (丸亀市産業文化部 農林水産課) 川池副課長、造田担当長 (丸亀市産業文化部 文化課) 石川副課長 (丸亀市農業委員会) 大西次長
	(株式会社地域計画建築研究所) 高野氏、山部氏、山口氏
欠席者	菅沼委員、柴田委員、西川 正則委員、土井委員、松原委員（五十音順）
議 題	1. 挨拶（林部長、小山会長） 2. 第３次丸亀市産業振興計画策定業務委託先 紹介 3. 議事 (1) 第３次丸亀市産業振興計画策定について (2) 部会の構成及び部会長の選任について (3) 意見交換 ①コロナ禍における産業政策の在り方 ②次期産業振興計画基本理念について (4) その他 4. 閉会

会 議 の 概 要

1. 挨拶

丸亀市産業文化部 林部長より挨拶

京都橘大学 小山会長より挨拶

2. 第3次丸亀市産業振興計画策定業務委託先 紹介

株式会社地域計画建築研究所より挨拶

※株式会社地域計画建築研究所は以下、通称であるアルパックで統一する

3. 議事

(1) 第3次丸亀市産業振興計画策定について

(事務局)

- ・資料1・資料2により計画策定に向けたスケジュールの説明。

(2) 部会の構成及び部会長の選任について

(小山会長)

- ・資料3により部会の構成を説明。
- ・部会長の選任を行う。立候補や意見・質問等はあるか。

(委員全員)

- ・特になし。

(小山会長)

- ・事務局より何か案はあるか。

(事務局)

- ・農業・水産業部会長に松岡委員、商工業・新産業部会長に西川 平二委員、地場・観光産業部会長に矢野委員を提案する。

(委員全員)

- ・異議なし。

(3) 意見交換

① コロナ禍における産業政策の在り方

小山会長、続いてアルパックより、「コロナ禍における産業政策の在り方」について話題提供を実施。

(小山会長)

- ・丸亀市の産業政策の在り方について意見を頂戴したい。

(梶谷委員)

- ・ウクライナ戦争の影響で、日本もこれから食糧危機や物価高になる可能性がある。ウクライナ戦争前の価値観でいると危うい。

(小山会長)

- ・非常に重要な視点である。例えば、ウクライナは小麦の一大生産地だ。今年の冬以降は、ウクライナから小麦の輸出が減少して、食糧危機になることが予測される。
- ・おそらく日本は「食糧は買える」と思われるが、それは相対的に貧しい国の貧困や飢餓を犠牲にしているから大丈夫なだけの話だ。
- ・日本円は強い国際通貨だ。そういう中で買い支えることができる。しかし、それは結果としてどこかの国に回るはずだった食糧を奪っているだけであり、もしかしたら飢餓を助長してしまう可能性がある。
- ・したがって、農業振興を進める上では、必要最低限の食糧を自分達で確保していく視点が、地域経済を語る上では重要になる。
- ・これはサプライチェーンでも同じで、長い距離から調達するのではなく、近い距離から調達する方がリスクが少なくて済む。

(松岡委員)

- ・食糧問題の話が出てきたが、近年、食糧危機や食糧安全保障の話題が多く取り上げられている。食糧問題を農業者だけでなく、国民全体の問題として危機感を持っていくべきだ。
- ・そのためにまずは、食糧を支える基盤である農地、またそれを支える人材の確保が大事だ。
- ・ここ 10 年、貿易の自由化で農産物価格が低迷してその影響もあって、農業を支えている農家も「もうボランティアで農業はできない」というような状況に追い詰められている。
- ・兼業農家を中心とした香川県の小さな農家をどう持続可能なものにしていくか、これから産業政策を推進していく中でしっかりと議論していきたい。

(小山会長)

- ・日本はこれまで安価な輸入の農作物に依存し過ぎていた。これからは、それを見つめ直して地産地消、あるいは国内でいかに調達できるようにするか、またそこに地域がどう貢献していくかが重要だ。

(筒井委員)

- ・自分の家が農家をやっていない若手も、農業をできるような環境づくりを行政をあげて、また地域をあげて推進していくことが大事だ。これは我々の石材の業種でも同様だ。若手が入っていけるような環境づくりを政策として進めていくべきだ。
- ・これまでの産業計画は 5 年や 3 年で策定されるが、3 年も月日が流れると、情勢は大きく変わってしまい、現状に合っていない計画となる。ぜひ 1 年もしくは半年で見直しができるような計画策定をやったらどうか。

(小山会長)

- ・学生の価値観も大企業志向だけではなく、「地域で何かをしたい」というような価値観

に変わってきている。新規就農に興味がある学生も増えている。

- ・そういう若い世代と地域がマッチングできれば、地域の魅力がさらに高まるのではないかな。

(東原委員)

- ・ウクライナ問題やアフターコロナなど、予測できない環境になっていく話がある一方で、人口減少や高齢化などの従来の社会問題はあるわけで、それらとアフターコロナなどの問題をどう掛け合わせてやっていくかが大事だ。
- ・その中で、地方都市がどういったことをすると、持続可能な地方になっていくかが不明だ。今回の計画策定に当たり、丸亀市が目指すべき明確な方向性を示せたら良い。
- ・全国で目指すべき地方都市のあるべき姿があれば教えていただきたい。

(小山会長)

- ・ほとんどの自治体が人口減少に悩んでいて、解決策を見出していないのが現状だが、丸亀市は加速度的に人口減少が進んでいるわけではない。まだここから可能性がある。悲観的には見ていない。
- ・人口減少や高齢化が進む地域でも、若い人と高齢者が共に働いて日々の生活を過ごす取り組みや、ふるさと納税を活用して地域を支えている自治体がある。
- ・人口減少は自治体の消滅を意味しない。「人がいる限りは地域は存続し続ける」というような意志を持って地域づくりをしていかないといけない。
- ・その中で、人口減少や高齢化などによる今日的な課題をしっかりと認識した上で、産業構造の転換を図っていく必要がある。
- ・そのためには地域のことを丁寧に分析しないと正確なことが見えてこない。やはり、皆さんのご意見を頂戴するとか、ヒアリングなどの調査をしっかりと進めていくことが重要だ。丸亀市の目指すべきビジョンは、この産業振興会議で作り込んでいくべきものだ。

(矢野委員)

- ・私たちが生きていく上で核となる「衣食住」のような生活の本質的な部分にもう一度焦点を当てることが大事だ。
- ・デジタル化をどう捉えるか。観光産業は特に、現場に行って自分で感じて体験することが重要で、その上でデジタル化を図っていくことが求められる。
- ・観光はデジタル化が急務となっているので、しっかりと今回の議論の中で具体化していきたい。

(杉尾委員)

- ・商店街をはじめとして、農業などでも「後継者がいない」「夢がない」という問題に直面している。
- ・そういった中で、「生きがい」や「やりがい」といったメンタルに訴えかけていくことが大事ではないか。生き生きとした人間がいれば街も活性化していく。公務員になる、

大企業に入るだけが幸せではない。自分が本当にやりたいことができる仕組みをどう産業政策の中に反映していくかが大事だ。

(小山会長)

- ・いくつかキーワードが出てきたと思う。まずは、やはり「地域というのは人である」ということ。人々が生き生きと働けるような社会を実現していくために、産業政策をいかにして作っていくか。
- ・また人間が生活する中で、根源的に重要なものは「食」であり農業振興である。
- ・そしてデジタル社会というのは、今後必ず来る流れで、それに対して地域がどのように対応していくか考えないといけない。

(眞鍋 宣訓委員)

- ・「分析なくして政策なし」、まさにその通りである。そこで何を分析するのが大事になってくる
- ・計画策定に当たっては、概念的な話ばかりするのではなく、丸亀市の強い所はどこなのか、また劣っている所はどこなのか、ポイントを押さえて、その中から具体的な目標を立てていけば、目に見えるような結果が出てくるのではないか。

(小山会長)

- ・強み、弱みを分析することが地域戦略の出発点だ。ぜひそのあたりも検討していきたい。

(内海委員)

- ・元気な地域を作るには、人を残すことと、人を増やすことが大事だ。そのためには若者に魅力的な地域であることが重要だ。
- ・現在の計画の中でも、若者と企業が触れ合う場面が設けられているが、それが成長の様々な段階にあると、もっと地域のことを知ってもらう機会になるのではないか。
- ・デジタル化とコロナということもあり、地域コミュニティが希薄化している。地域を作る上では、世代を超えたコミュニケーションが大事になってくる。

②次期産業振興計画基本理念について

(アルパック) 資料4により産業振興計画基本理念に関する説明。

(小山会長)

- ・基本理念について意見を頂戴したい。

(筒井委員)

- ・基本理念の文章を読む限り、変更すべき点は見当たらないが、「デジタル化」などの言葉は文章の中に入れるべきだ。
- ・地元大学への進学や、地元企業へ就職していく子どもを増やしていけるような文章を盛り込むべきだ。
- ・現在の小中学生が地元に残れるように、また都会に出ても帰って来れるような地域に

なるべきだ。

(藤井委員)

- ・「企業」を育てることも大事だが、何よりも「人」を育てることが大事だ。人を育てるという点でも、産業課だけではなく他の課との連携が必要になってくる。各課が策定する計画は重なる部分もあるかと思うので、丸亀市全体として同じ方向性で行っていくことが重要。

(小山会長)

- ・横のつながりは重要な視点である。
- ・「人」を育てることはこれから重要な課題となってくる。一回、市外に出たとしても、また丸亀に戻ってきてもらうためには、やはり丸亀の魅力をメッセージとして残しておくことが必要だ。

(桑田委員)

- ・あらゆる人を地域が受け入れていくという多様性が、今後は生活の豊かさに繋がる。
- ・デジタル化が進んでいるが、それを不便に感じる人も増えていくのではないか。例えば、携帯式の扇風機だったら途中で充電が切れたらもう終わりだが、うちわだったら、充電が切れる心配もなく、持ち運びもしやすい。デジタル化と逆行するかもしれないが、そういったアナログ的な部分も理念に含めていくことが大事だ。

(小山会長)

- ・デジタル化に加えて持続可能性、SDGs、環境志向、カーボンニュートラルの視点は避けては通れない。
- ・そういった点でも、丸亀市の伝統産業は重要な役割を担える。デジタル化は伝統産業と相反するものかもしれないが、これはデジタルの使い方次第で、新しい何かの発見や、産業振興の手がかりに繋がるのではないか。

(馬場委員)

- ・観光はコロナで止まっているが、今年の秋には3年ぶりに瀬戸内国際芸術祭が開催される。その来場者が丸亀にも寄ってもらうように、うどんや骨付き鶏などの「食」をアピールしていけたら良い。
- ・商店街は空き家ばかりになっているので、そこを瀬戸内国際芸術祭のイベント期間中だけでも一時的にお店を出して人を呼び込み、そして丸亀城にも寄ってもらえるような流れを作ることが大事だ。
- ・人に来てもらうためには「おもてなし」が最も重要。いつまでもコロナと言っているのではなく、何かアクションをしていくべきだ。

(小山会長)

- ・人の流れを作ることが地域活性化にも繋がる。
- ・デジタル化や横のつながり、持続可能性、環境志向などの様々なキーワードが出てきた。未来が予測できない不確実な社会の中で、そういったキーワードを基本理念にし

っかりと入れていくべきだ。

(西川 平二委員)

- ・今後の産業を考えていく上で、「デジタル化」は外せない言葉だ。
- ・SDGs の全ての問題に取り組むのは中小零細企業にとっては厳しい。ただ、1つや2つは自社でも関わっている所があるので、少しばかりは気に留めるべきだ。
- ・「100年企業」という言葉をもう少し単純に考えても良いのではないか。もっと産業ごとに強みと弱みを明確にして、各企業が力をつけていくことが求められる。
- ・税収が増えることが子育てなどの福祉の向上にも繋がっていく。そういった点でも、やはり企業が力を付けていくためにはどうしたら良いか、単純なことだが深く考えていくべきだ。

(小山会長)

- ・基本理念があって、その下に具体的な産業政策の取り組みが出てくるという意味でも、「100年企業」を突き詰めていくことは重要だ。

(松下委員)

- ・丸亀市はお城、川、山など、良いものが多いのに、なぜ上手く活用できていないのかと思う。
- ・地元で就職を希望する人もいるが、条件に見合う会社が少ない。また親世代が給料の良い会社に就職して欲しいと思う人が多い。

(小山会長)

- ・若い世代の考え方は変わってきている。かつてのように大企業だけに就職したいといった発想は徐々になくなっている。どちらかというところ、地域の中でどう自己実現していくかという所に視点が移っている。
- ・そのためにも、やはり企業が力をつけていく必要があり、それが可能になる産業振興計画を策定するべきだ。

(4) その他

(事務局)

- ・産業振興実施計画の2021年度実績については、会議時間の都合上、書面での報告とする趣旨を説明。

(西川 平二委員)

- ・次回の会で説明の時間をとることはできないか。

(事務局)

- ・第2回丸亀市産業振興推進会議で説明時間を設ける。
- ・第2回丸亀市産業振興推進会議の日程や場所などを案内。

午後4時00分閉会

(以上)